“芸術の新しい楽しみ方とは”

「発生の場 2020」

報告書

2020 年 1 月 27 日

SMAART 受講生

井手香織

芸術の新しい楽しみ方とは

2020 年「発生の場」。
現代における芸術表現および芸術の新しい楽しみ方を紹介するイベント。
今回、講評を行うにあたりまずはこの「発生の場」の趣旨を自分の解釈で捉え今回の展示会の形と照らし合わせ考えてみた。
"芸術の新しい楽しみ方"とは？

まず最初に作品群を見て素直に感じたこと。
「アーティストの意図が分からない。」
キャプションもなくどういう視点から捉えれば良いのかもわからない。戸惑った。
しかし、それは「全てが自由」だという事。
正直、私自身芸術を語れる訳でもないし、観るという事においては初心者に近い立ち位置だと思っている。ここから面白さを見つける、難しい。1 つの作品から自身の創造性を使って膨らませていく作業。

ふと、脳裏に"臨床美術"という言葉が頭に浮かんだ。今自分の目の前にある「もの」。視覚だけでなく触覚、味覚等の五感を用いてその作品を捉え、自分自身を媒介にしてその「もの」を表現する。では、発生の場にあるこれらの作品群を視覚以外で捉えてみてはどうだろうか。
….扇風機は本当に扇風機なのだろうか？
冷たく細く固いワイヤーが張り巡らされた中に、羽があって思いっきり回っている。
しかし、床に置かれて音を立てながら行き場なくもがき回っているようだ。
電源コードの長さの範囲でしか動き回れない。
ふと、イメージしたのは"鳥籠"。
自由に勢いよく飛び回る羽がありながらも、電気という餌なしには動き回れない。
冷たい社会に囲われて踊らされる人間の滑稽な姿にも思えた。
視覚からくる先入観を疑い、事実を事実として捉えた時に違ったものとして感じる事が出来た。こういう楽しみ方もあるのかと。

作品を観ることは視覚で捉えた情報だけではない。目を閉じて作品が生み出す音を感じてみたい。作品に触れてみたい。より面白く作品を楽しもう。そう思った時に楽しむ材料として足りないものも感じた。あぁ、そうだ。視覚・聴覚障害者の方々も芸術を楽しむ権利がある。そもそもキャプションなんて必要なくて、「体全てで感じる事が出来る情報」がより多く必要なのではないのだろうか。

「芸術の新しい楽しみ方」とは。

楽しみ方も人の数と等しく様々な手法があり、作品を紹介するのではなく、楽しみ方を提案していく方がより広がりがあり面白い。人の感情に響く作品はより人の記憶にも残る。どのような楽しみ方があるか。アートを語るというような敷居の高いものではなく、ただ単に楽しみを追求する為に、展示側と観覧者が共に語らい掘り下げていける場としても、"カフェ"というものの必然性は切に感じる。

芸術を知っていようがいるまいが、芸術とはもともとは人生の豊かさを生み出すものだと考えている。こと難しく考え表現するからこそ日常とかけ離れてしまい、その読み取り手にさも技術が必要かのような風潮がまだあると感じられる。関東にも事例が見られるような、「コインランドリー」という、より日常と密接している空間に併設されている「café」で住民や旅行者が哲学を語り合うような場所。そんな、日常と非日常との融合⇒日常化ができる場が、ひと一人に主体性を持たせる事も含めてこれから必要になってくると思う。社会的な教育の場としても今後そのような場が増えていくことを願いたい。